ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

 ２

　雲一つない青空。ここは『研修所』で、四限の体育の時間に幼い声が響く。

「せぁあぃ！」

　ぼくは、そうさけんで木刀をふり上げる。相手の手ににぎられた木刀が、大きな音を立てて、はじかれたように飛んでいった。かんはつを入れずに、ぼくは、あぜんとして空を見上げた相手ののど元に木刀をつきつける。

「勝者、研修生番号２４９９６８番！」

　しんぱんの声を聞いて、ぼくはつきつけた木刀をゆっくりと下ろす。たたかった相手の子の手が、まるで電流でも流れているかのようにふるえていたのが、ちょっと気になったけど、一礼をしてから、ぼくは友だちの待つところにもどる。色白で、ブロンドのかみの毛の男の子――ぼくの友だちだ――が手を上げるので、ぼくはその手をたたく。パァンという、気持ちの良い音を立てるそれとは反対に、友だちの顔は、どこか暗い。たぶん、ぼくも同じような顔をしている。

今年で十才になるにもかかわらず、ぼくには名前がない。いや、正しく言うと『２４９９６８番』というのが、ぼくの名前だ。ここでは、ぼくや、他にもたくさんいる子どもたちは、みんな名前ではなく番号でよばれる。ぼくはここに来てから、もう六年になるけどいまだになれない。ぼくの友だちも、きっと同じ気持ちなのだろう。友だちだけでなく、きっとみんなも同じことを思っているにちがいない。

早く自分の名前がほしい。

　ここにいて、こう思わない子を、ぼくは知らない。

でも、ぼくは知っている。本当は、その子たちは、ここに来る前は自分の名前を持っていた、ということを。だから、じゅんすいな意味で名前がほしいと思っている子は、実はすくない。ぼくは、そのすくない中の一人だ。

「次、２５００００番と２４９８９２番！　早く前に出ろ！」

　しんぱんの声を聞いて、ぼくの友だちが立ち上がる。『２５００００番』というのが、ぼくの友だちの番号だ。

「がんばれ」

「おう」

　それだけ言葉を交わす。友だちは、カイザーナックルを両手につける。ぼくの武器は木刀だけど、友だちの武器は、トゲのついた、あのカイザーナックルだ。「がんばれ」とは言ったものの、銀色に光るそれは、当たると実に痛そうで、これからたたかう子がかわいそうだと、ぼくは思った。

　ぼくの友だちも、その『じゅんすいに名前をほっしている子』の一人で、ぼくとあの子は、ほかにも同じところが多い。親の顔を知らないこと、ここに来る前の自分の名前を知らないこと。こまかいクセとかをあげれば、キリがない。考えることも、周りからはいっしょだって言われる。

　そんなことを考えていたら、友だちのこぶしが、たたかっている相手のおなかに、めりこんだ。